

## 研究ノート

## 女性と知識(2)\*

森 川 甫\*\*

リンダ・ティンメルマンス著『女性の教養へのアプローチ(接近)(1598-1715)』<sup>1)</sup>の序論のなかで、「ルネッサンス期における女性の知識へのアプローチ」について、著者は次の3項目、—1. 女性論と女性の知識へのアプローチの問題、2. ユマニズムと宗教改革、および、女性の知識へのアプローチ、3. 女性教育に賛同する運動、16世紀の賛成論の限界と展望—によって問題を提起している。『社会学部紀要』第78号<sup>2)</sup>において、「1. 女性論と女性の知識へのアプローチの問題」をとりあげたが、本号では、「2. ユマニズムと宗教改革、および、女性の知識へのアプローチ」<sup>3)</sup>を扱う。

## 2. ユマニズムと宗教改革、および、女性の知識へのアプローチ

ユマニストたちと宗教改革者たちの提案は女性のチャンピオンたち<sup>4)</sup>の提案と異なり、しばしば抽象的なものではなく、より細心の注意を払った提案であると言えるが、女性自体がユマニストたちと宗教改革者たちの中心的な関心事であったのではなく、彼等が女性の教育の問題に取り組んだのは、彼等の大きな関心事の多くが女性問題に関連していたからである。すなわち、彼らの関心は聖書の本文を信徒大衆に伝えること、また、結婚を再評価することであり、これらのテーマは福音

的ユマニズム、宗教改革、プラトニズムに共通したテーマであった。

## 女性の宗教的教養

福音的ユマニストたち、少しのちには、宗教改革者たちが主として努力を払ったのは、唯一の源泉である聖書、ことに、新約聖書をとおしてキリストの教えを再発見することであった。ところで、エラスムス<sup>5)</sup>の表現によるこの「キリスト教哲学」はすべての人々にとって近づくことが可能であった。「それはいかなる年齢、性、財産、身分の人々をも排除しない」ものであった。

多くの点で、革命的なこのアピールは、エラスムスが教養の民主化に賛成であったことを意味するものではない。確かに、聖書は「無知な人々」にも、貧しい「単純な女性」たちにも啓示されるかも知れない。しかし、それはキリストの哲学が「三段論法よりも直観にあり」、「議論よりも生命であり、学識よりも靈感であり、推論よりも回心である」からである。高い教育は必要ではなく、「信仰を持つこと」が肝要であって、少数者にすぎない「学者になること」が重要なのではない。しかし、福音主義はその外見にもかかわらず、男女信者の大多数の宗教教育に関しては、民衆の低いレベルに合わせることを目指してはいなかった。

アピールが投げかけられると、宗教改革者たち

\*キーワード：女性、知識、教育

\*\*関西学院大学社会学部教授

1) Linda TIMMERMANS, *L'accès des femmes à la culture* (1598-1715), 1993, Edition Champion, Paris, 941 p.

2) 関西学院大学社会学部研究会、1997年10月発行。

3) L. TIMMERMANS, *op. cit.*, pp. 28-41.

4) クリスチーナ・ド・ピザン、ル・フランなど。Cf. 研究ノート「女性と知識」(1)『社会学部紀要』第78号。

5) Desiderius ERASMUS (1466-1536) ロッテルダム生まれのユマニスト。神学をスコラ哲学から解放し、聖書、教父などの信仰を探究し、人文主義的思想を確立しようとした。